

# マルクス貨幣論の研究

加 藤 寛 孝

本稿は、貨幣發生の論理の中に貨幣の本質を発見する意図から、マルクスの学説を批判的に展開し、その論理的問題点を指摘すると共に、その解決の為に自ら一つの仮説を提出するものである。論旨を明瞭にする為に、論述の背景となる典拠及び解釈上論争的とならざるを得ない諸論点の詳細な展開は、すべて本文に対する註記として与えられる。貨幣發生の前提は商品生産であるから、吾々の研究も商品論から始まる。<sup>1)</sup>

## § 1. 商品の価値

スミスが、勞働生産力改善の原因として主に技術的観点から分業一般を分析したのに対して、マルクスは、商品生産の基礎として専ら社会的観点から分業を分析して、事實上、私的にして自由なる分業という独自の概念に到達した。即ち、商品生産の基礎としての分業は、第一に、共產社会の内部に於ける分業と対立する意味で、私的な分業である。<sup>3)</sup>従つて、此の分業の生産物は必然的に交換されねばならない。広大な分業組織の一原子として各生産者が自ら生産する財は、彼の多様な欲望の極く一部分しか直接に満足させることはできず、しかも、その生産量は此の直接の満足を得るのに必要な量よりも遙かに多量であるから、各生産者は彼自身にとつては剰余となる生産物部分を互に交換する事によつてのみ、彼の多様な欲望を全面的に満足させ、かくて彼の生活を営むことができるのである。此の様に、私的分業は必然的に生産物の交換を発生せしめるが、生産物の交換は直ちに商品の発生を意味するものではない。何故ならば、他人の欲望を満足させるという社会的有用性（社会的使用価値）を持つと同時に、生産及び交換の自律的な規制者としての商品価値（簡単に、価値）を持つ場合に

のみ、生産物は商品となるのだからである。

従つて第二に、商品生産の基礎としての分業は、その各部門が何らかの形で（例えば身分的或いは民族的に）特定の生産者に固定され独占されている分業と対立する意味で、自由な分業<sup>5)</sup>でなければならない。此の分業に於いては、生産者は分業の各部門間を自由に移動して自分にとって最も有利と思われる部門で労働することができる。勿論、スミスの技術的な分析が示した様に、分業は各労働者を特定の仕事に専念させる事によつて、その仕事に於ける彼の能率を飛躍的に上昇させると同時に、他のすべての仕事に於ける彼の能率を殆ど無に等しいものとする。従つて労働者が彼の仕事を変える事は、分業の技術的效果にとつて望ましい事ではない。しかし新しい仕事に移つた労働者も時間がたてばそれに習熟して、彼の能率も平均水準に達するであろうから、自由な分業も現実的に決して不可能ではない。しかし、此の分業の本質的な効果は、現実<sup>6)</sup>に労働者の移動が行われる事ではなくて、その様な移動の可能性に基づいて労働の同質化が観念的に行われ、此の同質的労働の観念が逆に労働者の現実の行動（財の生産と交換）を規制する事である。各労働者は自由な分業に組入れられる事によつて、観念的に自分を他人と同じものとする様になる。かくて自由な分業は、各人の欲望を満足させる為に必要な財を最も能率的に生産する一つの抽象的な社会的な人間労働力の支出形式となり、各人の具体的な個別的な有用労働は、此の全体としての人間労働の一部としてのみ存在理由を持つものとなる。此の意味に於いて、スミスが述べた様に「等量の労働は、すべての時と所に於いて、労働者にとつて等しい価値を持つと云える」のである。自由な分業のもとで初めて、現実的に意味のある観念として抽象的な人間労働量という客観的価値量<sup>6)</sup>の概念が成立し、価値計算が可能となる。そして各労働者は等しく全体の一員として利益の平等を主張し、且つそれを承認せざるを得ないが故に、生産物の交換は等価交換とならざるを得ない。各生産物が、その生産に費用として投ぜられた価値量＝抽象的な人間労働量が互いに等しくなる様な比率で交換される場合にのみ、労働者の

利益の平等が実現されるからである。等価交換が実現するならば、分業の各部門に有利も不利もなく、かくて生産と交換の均衡が実現する。此の意味に於いて、価値は生産と交換の自律的な規制者であると云うことができる。

以上の論述から明らかな意味に於いて、私的にして自由なる分業は、必然的に生産物の等価交換を発生せしめ、かくて生産物に商品の形態を与えるのである。<sup>7)</sup>

## § 2. 価値の担い手としての使用価値

私的にして自由なる分業の個々の生産物は、交換過程に入つて他の生産物と等価に交換される事によつてのみ、それが商品である事を実証する。即ち、交換過程に於いて他の生産物の所有者によつて需要され、彼の生産物と等価で交換されて初めて、その使用価値は社会的使用価値である事、従つてその生産に投ぜられた具体的有用労働は社会的な有用労働であり、抽象的人間労働の一部分であり、かくて価値である事が実証されるのである。商品の価値は、その使用価値の社会的規定に依存する。此の意味に於いて質的観点から、商品の使用価値はその価値の担い手であると云える。<sup>8)</sup>

他方に於いて、価値は使用価値としての商品体の中に実存する。社会的人間労働は商品体に結晶して初めて価値としての存在を得るのだからである。従つて商品体の一定の分量は、同時にそれに体化している価値の一定量であり、前者の増減に比例して後者も増減する。此の意味に於いて量的観点から、商品の使用価値はその価値の担い手であると云える。商品体の量は、度量単位が与えられるならば、その単位の個数として表現される。商品体が使用価値として本来分割され得ない物体である場合には、その商品体そのものが単位となつて、使用価値の量は商品体の数（整数）として表現される。他方、商品体が使用価値たる事を失わないで任意に分割され統合され得る均質的な物質である場合には、単位を適当に定めなければならない。或る特定の単位によつて使用価値量は一つの数（分数）となるけれども、他の単位によれば同じ使用価値量は別の数となる。従つて、数に

単位の呼称を付ける事によつて、それが如何なる單位の数であることを明示しなければ、使用価値（商品体）の量を正確に表現することはできない。今、任意の商品体の種類及び量をA、その或る單位を $\bar{A}_1$ 、その別の單位を $\bar{A}_2$ で表わせば、同じAは異つた数（ $x$ と $y$ ）で表わされる。

$$(1) \quad A = x \cdot \bar{A}_1 = y \cdot \bar{A}_2$$

反対に、異なる量が同じ数で表わされ得る。

$$(2) \quad x \cdot \bar{A}_1 = x \cdot \bar{A}_2$$

さて、使用価値量Aに体化している社会的勞仿量（価値量）を $Va$ で表わせば、前者の後者に対する比率は、勞仿の生産力 $Pa$ である。

$$(3) \quad \frac{x \cdot \bar{A}_1}{Va} = Pa$$

此の式に於いて、 $\bar{A}_1 = 1$ であるが單位の呼称として現われている。価値量の單位は絶對的に与えられているものとするから呼称は不必要で、 $Va$ はそのまゝで数である。此の式から明らかな様に、一定量の商品体の価値は、それを生産する勞仿の生産力の増減に反比例して減増する。生産力に変化がなければ、商品体量とそれに体化している価値量とは正比例して増減する。此の意味に於いて、使用価値は価値の量的な担い手である。<sup>9)</sup>

### § 3. 商品の価値形態

前にも述べた様に、生産物が商品である事を実証する為には、それは交換過程に入つて他の生産物と等価で交換されなければならない。そこで、交換の比率が生産者にとつて最大の関心事となる。彼の生産物は既に、その生産過程に於いて投入された平均勞仿量として自己の価値の内在的尺度を持つていたのであるが、他の生産物との交換過程に於いて、もう一つ、外在的尺度を持つことになる。他の生産物のどれだけの分量と交換され得るかという交換比率（交換価値）がそれである。内在的尺度（勞仿量）により測定される価値の大きいさと、外在的尺度（交換比率）により測定される価値の大きいとは、均衡状態（等価交換）に於いては当然に一致する。商品の内部的な価値は、他の商品の一定量と交換され等置される事によ

り、外部的に測定可能の量として現われる。丁度、商品の自然的形態（商品体）がその使用価値としての形態であるのと対照的に、それと等置される他の商品の自然的形態（商品体）はその価値としての形態（価値形態）である。商品の価値表現の形式として純粋に論理的に此の価値形態を考察する為に、吾々はしばらく現実の交換過程（交換関係）から離れて、観念的な等置過程（価値関係）を対象としなければならない。

考え得る最も簡単な価値関係は二つの商品の関係である。此の<sup>10)</sup>関係に於いては、一つの商品Aの価値表現は、他の商品Bの等置によつて与えられる（簡単な価値形態）。均衡状態に於ける両者の等置は、

$$(4) \quad A = B$$

という式で表わされる。此の式に於いては、AとBの特殊な質はもはや問題ではなく、AもBも等しい量（価値量）である事が示されている。Aは、Bと等置される事により相対的に価値である事が示されるので相対的価値形態をとり、Bは、Aに対して等価として現われるから等価形態をとると云われる。次に、Aの価値（相対的価値）の大きさは、等置されるA、Bの分量の比率（観念的な交換比率）で表わされる。A、Bの数的表現は

$$A = x \cdot \bar{A}, \quad B = y \cdot \bar{B}$$

であるから、(4)の数的表現は

$$(5) \quad x \cdot \bar{A} = y \cdot \bar{B}$$

となる。此の式は明らかに商品体の関係としては成立しない。商品体の度量単位としては  $\bar{A} = 1$ ,  $\bar{B} = 1$  であり、一般に  $x \neq y$  だからである。(5)が成立する為には、 $\bar{A}$ ,  $\bar{B}$ は商品体の単位としてではなく、別の数値として、即ち夫々の商品体単位に体化している価値量（単位価値量）としての意味を持たねばならない。 $\bar{A}$ ,  $\bar{B}$ の価値量を  $\bar{V}a$ ,  $\bar{V}b$  で表わせば、(5)は価値方程式としては

$$(6) \quad x \cdot \bar{V}a = y \cdot \bar{V}b$$

となる。こゝで  $\bar{V}a$ ,  $\bar{V}b$ は  $Va$ ,  $Vb$ の単位（絶対的な価値の単位）ではなく、単に  $\bar{A}$ ,  $\bar{B}$ の価値量であるから、その大きさは労働の生産力  $Pa$ ,  $Pb$

に依存するものである。(6)より

$$(7) \quad \frac{\bar{V}a}{\bar{V}b} = -\frac{y}{x}$$

を得る。かくて等価商品Bの一単位の価値量  $\bar{V}b$  に対する比率（相対的価値量）としての商品Aの一単位の価値量  $\bar{V}a$  は、商品体Aの一単位に対して等置される商品体Bの単位数としての一つの数的表現を得る。商品Aの交換価値は、商品Aの価値の現象形態としての相対的価値形態に他ならない。(7)から明らかな様に、商品Aの交換価値は、A、Bの単位価値の絶対的变化ではなく相対的变化によつて変化せしめられる。

二つの商品の価値関係から三つ以上の商品相互の価値関係へ進むのは論理的に当然な発展である。此の第二の關係に於いては、一商品Aの価値表現は、単に他の一商品Bとの等置だけではなく他の多くの商品C、D、E、等々と次々に等置される事によつて与えられる（展開された価値形態）。

$$(8) \quad A \left\{ \begin{array}{l} = B \\ = C \\ = D \\ = E \\ = \text{等々} \end{array} \right.$$

此の第二形態は、簡単な形態の集合である。Aの立場から云えば、その相対的価値の表現は、その表示系列が無限であるから未完成であり、様々な数値の雑然たる集合であるという缺陷を持つている。視野を商品世界の全体に拡大すれば、今やすべての商品の価値が此の形態をとるのであるから、各商品の相対的価値は他の各商品のそれとは異なる無限の表示系列であり、様々な数値の雑然たる集合であるという拡大された缺陷を持つと共に、価値表現の複合又は競合という社会的な缺陷を持つ事が判明する。<sup>11)</sup>例えば、AがB及びCと等置されるならば、同時に間接的にBとCが等置されるのであつて、改めてBがCに対して直接に相対的価値形態をとる必要はない。

$$\left. \begin{array}{l} A = B \\ A = C \end{array} \right\} \therefore B = C$$

同じ事はB、Cの立場から

$$\left. \begin{array}{l} B = A \\ C = A \end{array} \right\} \therefore B = C$$

と云える。即ち、BもCも同一のAを共通の等価商品（価値尺度）とする事によつて、相互に間接的に等置され、かくて  $B = C$  という直接的表現を節約することができるのである。同様に、一つの商品Aを除くすべての商品が協調して、此の排除されたAを共通の等価商品として自己の価値を表現するならば、それらの商品相互の簡単な価値表現はすべて不要となる。

此の様な「商品世界の共同事業」<sup>12)</sup>を契機として、吾々は第三の価値形態（一般的形態又は貨幣形態）に到達する。此の形態は、先の第二形態の式を顛倒した形として

$$(9) \quad \left. \begin{array}{l} B = \\ C = \\ D = \\ E = \\ \text{等々} = \end{array} \right\} A$$

と表わされる。此の形態に於いて初めて、諸商品の価値は一個同一の商品の価値との同等性によつて表示され、相互に数的に比較され得る交換価値として現象する。一般的等価形態に排除される商品は、一般的価値尺度として機能する商品即ち貨幣となる。任意の商品単位例えば $\overline{B}$ の貨幣商品Aでの一般的な相対的価値表現は、価格形態である。

$$(10) \quad \overline{V}_b = x \cdot \overline{V}_a \quad \therefore \frac{\overline{V}_b}{\overline{V}_a} = x$$

通常、価格はその数的表現に価格の単位呼称が付けられるが、此の価格の単位は決して単位価値量 $\overline{V}_a$ ではなく、単に貨幣商品体の単位 $\overline{A}$ である。

貨幣商品の生産に於ける労力の生産力が変動して、その単位価値量が変動するならば、同一の価値は様々な貨幣商品単位数（価格）で表現されるから、価格は価値の絶対的表現ではない。

マルクスは、第三形態は既に第二形態に含まれている逆の関係であるから、第二形態の価値方程式の両辺を顛倒する事によつて此の方程式の全性格を変化させ、第二形態を第三形態に転化させることができると説いているが、第三形態と第二形態との本質的な相異は「商品世界の共同事業」<sup>13)</sup>が存在するか否かである。今、一つの商品の価値表現だけを考えるのではなくすべての商品の価値表現を考えるならば、各商品の個別的な表現である第二形態は、正確には、

$$(11) \quad \left\{ \begin{array}{l} A = B, \text{ or } C, \text{ or } D, \text{ or } E, \text{ or } \text{等々} \\ B = A, \text{ or } C, \text{ or } D, \text{ or } E, \text{ or } \text{等々} \\ C = A, \text{ or } B, \text{ or } D, \text{ or } E, \text{ or } \text{等々} \\ D = A, \text{ or } B, \text{ or } C, \text{ or } E, \text{ or } \text{等々} \\ E = A, \text{ or } B, \text{ or } C, \text{ or } D, \text{ or } \text{等々} \end{array} \right.$$

と表現されねばならない。(11)を顛倒すると

$$(12) \quad \left\{ \begin{array}{l} B =, \text{ or } C =, \text{ or } D =, \text{ or } E =, \text{ or } \text{等々} = A \\ A =, \text{ or } C =, \text{ or } D =, \text{ or } E =, \text{ or } \text{等々} = B \\ A =, \text{ or } B =, \text{ or } D =, \text{ or } E =, \text{ or } \text{等々} = C \\ A =, \text{ or } B =, \text{ or } C =, \text{ or } E =, \text{ or } \text{等々} = D \\ A =, \text{ or } B =, \text{ or } C =, \text{ or } D =, \text{ or } \text{等々} = E \end{array} \right.$$

となり、第二形態の元の表現形式にはならないが、此の形式も(11)の逆の関係として同じく第二形態を表現するものである。確かに形の上では(12)は第三形態の集合の様に見える。しかし、これは明らかに第三形態ではない。何故なら、こゝには未だ「商品世界の共同事業」が存在しないからである。第三形態の集合と云う事すら論理的矛盾である。何故なら、一個同一

の商品を共通の等価形態とする第三形態は、かゝる集合の解消した形態に他ならないからである。だから、正確には(12)は第三形態を表現する方程式の形の集合であると云わねばならない。マルクスは、価値形態と価値方程式の形とを同一視した結果、方程式の形の変化から価値形態の変化を導びくという誤りを犯したのである。

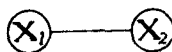
貨幣商品の相対的価値は、これこそ方程式(9)を顛倒して得られる(8)として表わされる。これは第二形態を構成する方程式と全く同じ形だが、第二形態が第一形態と異なる様に、此の形は第二形態と異なるものである。勿論、形が同じである以上、第二形態の個別的な式について指摘された缺陷は、そのまゝ貨幣商品の相対的価値表現にも妥当するけれども、第二形態の最大の缺陷たる価値表現の複合はもはや存在せず、共通の価値表現を持たないのは、此の貨幣商品だけである。

#### § 4. 貨幣の本質

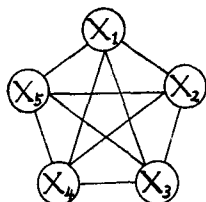
問題は、マルクスの云う「商品世界の共同事業」が如何にして発生するかである。此の説明を抜きにして貨幣形態の発生を証明することはできない。また、一般的価値尺度としての貨幣は、<sup>14)</sup>分数的な商品ならばどの商品であつてもよいのに、それが特定の商品（金又は銀）の社会的な独占となるのは何故であろうか。<sup>15)</sup>マルクスの云う「社会的慣習」<sup>16)</sup>は如何にして形成されたのか。これらの問題に答える為には、吾々は再び観念的な価値関係から現実の交換関係に立ち戻つて両者の関連を考えなければならない。実際マルクスは価値形態の展開に際して、屢々交換関係と価値関係とを混同している。等価形態は「直接的交換可能性の形態」<sup>17)</sup>だという規定も、此の混同から生じたものである。確かに、商品が観念的に価値形態を持つのは交換過程へ入る為の前提であるから、価値関係と交換関係とは密接な関連にあるものであるが、論理的には夫々別個の観念である。

此の事は、交換関係と価値関係を対比する事によつて明白となる。吾々は、三つの価値形態に対応する三つの価値関係を次の様に図式化する。

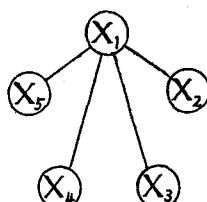
価値関係Ⅰ



価値関係Ⅱ



価値関係Ⅲ



価値形態Ⅰ

$$[X_i = X_j]_{i, j=1, 2}$$

$$(i \neq j)$$

価値形態Ⅱ

$$[X_i = X_j]_{i, j=1, 2, \dots, 5}$$

$$(i \neq j)$$

価値形態Ⅲ

$$[X_i = Y_j] \begin{cases} i=1, 2, \dots, 5 \\ j=1p \\ i=1b \\ j=1, 2, \dots, 5 \end{cases}$$

$$(i \neq j) \\ (p=1, 2, \dots, 5)$$

$X_i$  は商品の種類を表わし、簡単の為に五種類に限る。価値形態を表現する為に、

$$[X_1=a, X_2=a, X_3=a, \dots, X_n=a] = [X_i=a]_{i=1, 2, \dots, n}$$

という方程式の集合を表わす記号を使う。これによつて簡単な価値形態がすべての価値形態の基本的な形態である事がわかる。ところで、此の三つの図式は交換関係の図式として見ることもできる。即ち、交換関係の形態としては、Ⅰは直接交換又は物々交換の形態であり、Ⅲは間接交換又は貨幣交換の形態である。従つて、交換形態Ⅰ及びⅢに於ける交換関係は現実的であるが、Ⅱに於けるそれは単に観念的なものである。多数の財貨間の直接交換は不可能だからである。交換関係の歴史的発展は、Ⅰから直ちにⅢの形態へ発展すると考えられる。商品の現実の交換形態はⅢでしかあり得ない。故に商品の価値形態も形態上それに対応する一般的価値形態として初めて社会的に妥当な形態となるのである。<sup>18)</sup>

さて、形態Ⅲの交換関係としての「商品世界の共同事業」とは何であろうか。それは、一般的交換手段としての貨幣形態の発生である。かくて価

値關係に於いては一般的價值尺度としての貨幣が発生し、交換關係に於いては一般的交換手段としての貨幣が発生する。両者は現実的には統一されて一つの貨幣商品の二つの機能となるのであるが、此の統一は如何にして行われるか。先ず、一般的價值尺度は同時に一般的交換手段である事を必要とするであらうか。否。價值形態の論理によれば、それは觀念的な等置の形態であるから、どの商品も一般的等価形態をとることができるからである。ところが逆に一般的交換手段としての商品は、商品生産社会の中では必然的に一般的等価形態をとらざるを得ない。何故なら、此の場合交換關係は必然的に價值關係を含み、前者に於ける一般的交換手段の立場は、必然的に後者に於ける一般的價值尺度の立場となるからである。だから、觀念的にはどの商品も一般的價值尺度となり得るが、現実的には一般的交換手段となり得る商品だけが一般的價值尺度となるのである。マルクスが貨幣形態と呼ぶものは、一般的等価の役割が一般的交換手段として選ばれる独自の商品に歸着した形態であつて、かゝる意味に於ける貨幣形態の發生の証明は、交換關係一般の分析を必要とする。要するに、或る商品が貨幣になるのは、現実的に一般的交換手段となるからであつて、觀念的に一般的價值尺度となるからではない。此の意味に於いて、貨幣の本質は一般的交換手段である<sup>19)</sup>と云うことができる。

## § 5. 一つの仮説

問題は依然として残つている。即ち、現実の交換過程に於いて如何なる論理によつて一般的交換手段が発生するかを説明せねばならない。これは、貨幣の現実の歴史、特に貨幣が鑄貨の形態をとる以前の所謂物品貨幣の歴史の研究によつてのみ可能であるが、やはり何らかの意味で交換の便宜の爲に交換手段による間接交換という形態が発生したものと想像される。マルクスは貨幣形態が金という商品に歸着する歴史的事情を説明しないで、單に、交換の原始的段階では重要な輸入品か、又は家畜の如き主要な譲渡され得る財貨が貨幣となると述べているにすぎない。

私はこゝに一つの仮説として、富の不平等を前提とする経済的実力者

(例えば「長者」)の選択という視点を提出したい。金が一般的交換手段として一般的に認められ受け取られるのは、金が直接に誰にとつても使用価値であるからではない。金は、米とか布とかいう生活品に比べれば、一般的にはむしろ直接の使用価値を持たないであろう。しかし「長者」にとつては金は直接に使用価値であり得るのであつて、彼はそれを手に入れる為には彼にとつて非使用価値である余分な米とか布とかを提供するであろう。かくて、「長者」の富に対する一般の信用に裏づけられて、金は一般的に直接的な使用価値を持つ生活品一般の代理物として、間接的に一般的使用価値を持つものとなり、その物理的適性の故に交換手段に転化したのではなからうか。

註 1) 本稿の主要な研究対象は『資本論』(Dietz Verlag, 1953 より引用)冒頭の第一章商品と第二章交換過程である。第一章は、商品一般を使用価値と価値の二つの側面から観念的に分析する。これに対して第二章は、個々の商品の現実的関連としての交換過程が諸商品の使用価値としての区別と価値としての等置という互いに排斥する二つの関連を含むという矛盾から出発し、その解決として貨幣の発生を理解する。即ち、貨幣は交換手段として一般的使用価値である故に、商品所有者の個人的欲望から独立してどの商品とも直ちに交換され得る価値であるから、貨幣形態に於いては、商品が交換過程の中で持つ矛盾が解決されているのである。

2) ここで商品生産とは、資本制商品生産の基本法則として抽象的に構成された概念である。「スミスが論じている商品は、元来商品資本であり、かくて資本制生産過程の結果である。故に此の過程が前以て分析されねばならなかつた筈である。此の過程の前提そのものは商品流通であるから、此の過程の説明はそれと独立して先行する商品分析を必要とする。」(II, S. 392) マルクスが資本制生産過程の前提は商品流通であると言う時、恐らく封建経済から資本主義経済が発生する歴史的契機としての商品流通という観念に影響されたのであろうが、此の文章は資本制生産過程の分析の為の一層抽象的な論理的基礎としての商品分析の必要を述べているのである。従つて此の意味に於ける商品分析の対象となる商品生産は、抽象的な概念であつて、具体的な歴史的実在としての概念ではない。だからそれは、歴史的に資本主義経済に先行する封建経済を説明するものでもない。マルクスの資本主義経済分析的基本的方法は、かか

る抽象的な商品生産の分析から得られる価値法則を、労働力という特殊な商品に適用するという点に依存する。「此の特殊な商品たる労働力が、労働を提供しかつて価値を創造するという独自の使用価値を持つている事は、商品生産の一般法則には影響し得ない。」(I, S. 613)

- 3) 「一般に使用対象が商品になるのは、それが相互に独立して営まれる私的労働の生産物であるからに他ならぬ。」(I, S. 78) 「社会的生産過程に於ける人々の単なる原子的行動は、従つて彼ら自身の生産関係が彼らの統御と彼らの意識的個人行為から独立の客観的姿態をとる事は、何よりも先ず、彼らの労働生産物が一般に商品形態をとる点に現象する。」(I, S. 99)

- 4) こゝで生産者とは、商品生産がそうであるのと全く同様に抽象的な概念である。自分の土地と道具と労働力だけで財を生産する労働者というのがその内容である。

- 5) 此の自由な分業という規定はマルクスの説明に於いては必ずしも明確ではないけれども、彼の価値概念は確かに此の規定を前提とするものである。「労働一般というこの抽象は、単に各種の労働の具体的な総体を精神で考えた結果であるばかりではない。一定の労働に無関心であることは、個人がたやすく一つの労働から他の労働に移つていき、しかも一定種類の労働が、個人にとつて偶然であり、従つて無関心であるような一つの社会的形態に照応するものである。」(「経済学批判序説」岩波文庫版『経済学批判』318頁)「吾々の資本主義社会では、労働の需要の方向が変るにつれて、人間的労働の或る一定の部分が、或いは裁縫業の形態で或いは織物業の形態で順次に供給される。労働のかゝる形態変換は摩擦なしには行われぬかも知れぬが、しかしそれは行われねばならない。」(I, S. 48)「価値表現の秘密、即ちすべての労働が人間的労働一般であるが故の・またその限りでの・すべての労働の同質性及び同等な妥当性は、人間の同質性の概念が既に人々の確固たる先入見となつてゐる時のみ解明され得る。」(I, S. 65) マルクスは1クオーターの小麦 =  $a$  ツェントネルの鉄という二商品の交換比率を示す方程式の分析から出発して、之らの商品に共通の性質としてそれらが等しく労働生産物である事を指摘し、共通者なるが故に労働力支出の具体的形態から抽象された人間労働一般の結晶として商品の価値を定義する。恐らくヘーゲルの思考様式に影響されて、現象としての交換価値から本質としての価値を抽象する際に、マルクスは使用価値と非使用価値の矛盾という形式を余りに強調しすぎている。従つて、有用労働と抽象労働という労働の二重性格も、二重という形式が強調されるあまり、抽象労働そのものの内容、特に

その社会的規定（私的にして自由なる分業）が二次的なものとなり、遂には「生理学的意味での人間労働」（I, S. 51）という観念的な抽象概念とすり換えられる危険を招いたのである。だから非使用価値として抽象的労働が何か偶然にマルクスの好みによつて価値であると断定される様な誤つた印象を与えかねないのである。実際はそうではなくて、価値は社会的労働としてのみ商品の生産と交換を規制し得る現実的なものとなり、又既にかゝるものとして生産者＝労働者の意識の中にも実在しているのである。交換の分析からたまたま社会的労働が価値として発見されるのではなくて、価値としての社会的労働は、そもそも商品交換を成立させる基礎として実在しているのである。

分業という生産組織の観点からは、商品の交換比率の問題と相互依存の関係にある商品の生産量の問題を分析しなければならない。しかしマルクスは商品生産の問題を此の観点から特に分析する事をしないで、単に生産と交換の均衡状態—交換の「正当な比率」（I, S. 42、及び『批判』23頁）—を前提したのである。「私的労働生産物の偶然的で絶えず変動している交換割合に於いては、その生産の為に社会的に必要な労働時間が規制的な自然法則として強制的に作用する。」（I, S. 80）此の強制的な作用の機構は、商品の生産と交換の均衡の機構である。

- 6) Adam Smith; *The Wealth of Nations*, Mod. Lib. ed. p. 33. 此の文章に始まる有名な一節は労働価値説の古典である。マルクスはこれに対して最初「彼は商品の価値がそれに含まれている労働時間によつて規定されるという事と、商品の価値が労働の価値によつて規定されるという事を絶えず混同して、くわしく説明する時にはいつも動揺しており、そして社会的過程が同質でない労働のあいだで強力に遂行する客観的な同質化を、個人的諸労働の主観的な同格化であると誤認している。」（『批判』68頁）と批判しているが、此の批判はスミスに対して正當ではない。第一に、スミスが労働の価値と云う時それは労働の時間そのものに他ならない。時間が価値として評価されるのである。だから労働の価値とは商品の価値と云う場合の価値ではなくて、商品に含まれた労働時間をまさに価値と呼ぶ根拠としての労働の評価を表わすものである。マルクスは労働の価値という表現に対して神経質になりすぎている。それは無理もない事である。と云うのは、彼の資本主義分析の原理は労働と区別された労働力が商品として規定される点に依存しているからである。商品価値を持つのは商品としての労働力であつて、労働は商品ではないから価値を持たないというわけである。スミスの云う労働の価値は決して此の原理と矛盾するものではない。スミスは決して労働は商品であつ

て商品価値を持つと云っているわけではないのである。

第二に、労働を価値と評価する事はスミスに於いては決して個人的諸労働の主観的同格化ではない。彼の云う価値としての労働は、個別的な労働そのものではなく「健康と体力と精神が普通の状態にあり、熟練と技巧の程度もまた普通の」(ibid.)労働者の労働であり、とりも直さず抽象的な人間労働なのである。抽象的な労働といえども、現実には正常的な標準的な個別労働として実在の形態をとるのである。それによつて初めて、商品生産者の価値計算が可能となり、商品は観念的に貨幣と等置され、かくて価格を持つことができるのである。

『資本論』に於いても第一の点についてマルクスは依然として誤解しているが、第二の点については殆ど先の批判を撤回している。「スミスは、労働はそれが商品の価値で表示される限りでは労働力の支出としてのみ意義を持つ事を感じてはいるが、しかし此の支出をば単に安息、自由及び幸福の犠牲とのみ解して、正常的な生活行為とは解していない。」(I, S. 51, Note)

- 7) 従つて、私的であつても自由でない分業の生産物(歴史的には自由資本主義以前の私的交易財)は商品ではない。かゝる客観的価値を持たない生産物の交易に於ける質的な等置は全く恣意的なものであり、その量的比率は全く偶然的なものである。
- 8) 「いかなる物も、使用対象である事なしには価値ではあり得ない。物が無用であれば、それに含まれている労働もまた無用であり、労働として計算されず、従つて何らの価値も形成しない。」(I, S. 45)
- 9) 使用価値は「交換価値の素材的担い手をなす。」(I, S. 40)
- 10) 云うまでもなく吾々は発達した分業を前提しているのであつて、二つの商品だけを考えるのは全く観念的な考察である。それは単に論理的に最も簡単な関係であつて、二財貨だけの直接交換という原始的交換形態を意味するものではない。
- 11) マルクスは此の缺陷を指摘していない。彼はすべての商品が一般的等価形態を主張する事は論理的に成立しないという論点を強調している(I, S. 92)が、等価形態は本来受動的なもの(I, S. 53)であり、その発展は相対的価値形態の発展の結果(I, S. 73)であるから、此の論点は無意味である。私は本文で述べた社会的缺陷の克服を契機としてのみ、価値表現の「共同事業」が論理的に必然となると考える。

12) I, S. 71.

13) I, S. 70, S. 73.

14) § 2 参照。

- 15) 「一般的等価形態は要するに価値形態だから、どの商品にでも帰属し得る。」(I, S. 74) 「価値の適当な現象形態たり得るものは、その全標本が同じ均等な質を有する物質のみである。価値の大きいさの区別は純粹に量的なものであるから、貨幣商品は純粹に量的区別のできるもの、即ち任意に分割でき且つその諸部分が再び合成できるものでなければならない。」(I, S. 95)
- 16) I, S. 75.
- 17) I, S. 60.
- 18) 「一般的等価形態に於いて初めて、現実には商品が相互に価値として関連させられ、相互に交換価値として現象させられるのである。」(I, S. 71) 「商品所有者らが彼ら自身の財貨を他の種々の財貨と交換し比較するところの交易は、種々の商品所有者らの種々の商品が、それらの交易の内部で一個同一の第三の商品種類と交換され価値として比較される事なしには、決して行われぬ。」(I, S. 94)
- 19) マルクスが先ず価値尺度の機能から貨幣の概念構成を開始した事は直ちに彼が貨幣の本質を価値尺度とした事を意味するものではない。諸概念の論理的構成を主たる目的とする彼にとつては、価値論からの発展として貨幣論を構成するにあつて、価値尺度の観点から始める事は当然の順序であつた。その結果、交換過程の歴史的発展の観点は、第二次的な位置へ後退せざるを得なかつたのである。
- 20) 誰にとつても直接に使用価値である財貨は消費の対象物であるから、その取得者が夫々自らそれを消費しないで他人に再び譲渡するとは信じ難い。物々交換経済に於いて或る財貨種類(例えば塩)が屢々交換過程に現われるからといつて、直ちにそれを物品貨幣と混同してはならない。

(経済学研究科 中山ゼミナール)